

## ■□ 開会挨拶

若林 靖永（くらしと協同の研究所 理事長）



今ご紹介いただきました、くらしと協同の研究所理事長の若林靖永と申します。

去年は総会記念シンポジウム、中止にいたしました。1年前を思い出しますと、コロナの広がりが本当に想定できない、予想できない状況で、日本で、そして世界で広がっていきまして。大学とか学校とか休校になる、企業もリモートワーク等広がるなど大変なことが起こっていました。そういう状況のもとで、生協の場合、地域生協は利用者が急拡大をする一方で、大学生協や医療生協は経営業績が大きく悪化するなど、私たちの仕事、持ち場においても、そして私たちの生活にとっても大変な状況に見舞われておりました。こういう状況のもとで、昨年は、くらしと協同の研究所の総会記念シンポジウムを頑張ればオンラインで開催できないわけではないけれども、無理して開催するまでもないだろうと。それよりも、皆さんはそれぞれの持ち場や生活で、しっかりとコロナに向き合って頑張っていくことじゃないかということで中止にいたしました。

今年は、もうちょっとコロナの見通しが立ったかと言いますと、まだまだ感染拡大は続きますし、ワクチンの接種もかなり頑張りは始めている状況ではありますが、まだまだ時間がかかりそうです。こういう状況で、引き続き、この新型コロナウイルスの感染については注意が必要な状況ではありますが、ある程度見通しが立つ状況になってきたということもございまして、2021年の総会記念シンポジウムは、オン

ライン開催とさせていただきます。もともとは、このコープ・イン・京都で集まってやろうということで準備しておりましたけれども、基本的に完全オンライン開催での提供になりました。そのように、私たちにとっては結構予想外という議論にもなりますが。でも実はこれ、予想外で大変なんだという見方は、ちょっと表面的なんです。やっぱり新型インフルエンザとかSARSとか、今までのパンデミック、いわゆる感染症の問題というのは世界的な脅威になっており、さまざまな国際機関あるいはシンクタンクでは、パンデミックが、この21世紀の人類社会を脅かす重大な懸念事項のトップ10に常に入っているということだったわけです。ところが残念ながら、すでにそういうふう将来起こりうる危機として言われていたにもかかわらず日本は、十分に備えができていどころか、これまでの新型インフルエンザやSARSの経験に学ばず、ほとんど手を打ってこなかったという体たらくで、喉元過ぎれば熱さ忘れるっていうのは、個人でも、国、社会でもあるんでしょうけども、そんなものになってしまっています。やっぱりそれは駄目ですね。ぜひ、このコロナの経験をいかに学んで未来に生かしていくかということが、私たちの、そして、くらしと協同の研究所にとっても大きなテーマ、課題になると思います。

話は変わりますが、7月3日、今日は国際協同組合デーになります。国際的に、本当にこの新型インフルエンザ、COVID-19

の状況の下で、生協、地域社会がどうなるのかということを考えようと呼び掛けられています。本日の総会記念シンポジウムは、生協の関わり、あるいは地域社会の再建というところにフォーカスしながら、東日本大震災から10年ということで、これまでの10年を振り返り、これからのことについて考えるというテーマで取り組む予定にしております。オンラインということになりましたけれども、しっかり未来を議論する、そして東日本大震災で起こったことを決して忘れないということを刻んで、頑張ってまいりたいと思います。今日はお忙しいなかご参加いただき、ありがとうございました。ぜひ、しっかりと最後までご参加いただきますようお願い申し上げます。